

新潟県立植物園

所在地：〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津186番地

TEL：0250-24-6465

mail：botanical@greenery-niigata.or.jp

URL：http://botanical.greenery-niigata.or.jp/

開園時間：9:30-16:30

休園日：毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は翌日）、
年末年始（※展示替え臨時休館あり）

植物園概要：新潟県立植物園では、全国有数の生産量を誇る花木ツツジ・ツバキ・ボタンや、県内に自生する植物を収集し植栽すると共に、それらの歴史や文化、植物学的特性などを年9回行う大規模な企画で紹介しています。

植物保全活動：植物多様性保全拠点園として希少植物の収集・保全を行うとともに、生息域内保全活動の指導や生物多様性保全の普及啓発活動も行っています。また、それらの希少な植物や保全活動を園内での展示や植物園だよりで紹介することにより、県民の保全意識を高める啓発活動を行っています。



新潟県の絶滅危惧植物およびツツジ属植物の保全活動

新潟県は、12,581.75 ㎢と全国で5番目に広い面積を有し、約3,000種類の植物が自生する豊かな自然を誇ります。その中で絶滅危惧植物に指定されている350種を対象に、当園ではそれらの植物の収集・保全を行うほか、地域との協働による保全活動、地元新潟大学との保全生態学的研究、環境についての総合学習支援などを実施しています。

また、新潟県立植物園の所在する新潟市秋葉区は国内でも有数の花き生産地として知られています。中でもアザレア、シャクナゲを含むツツジ類は全国一の生産があることから、当園でも特にツツジ属植物の収集に力を入れており、世界有数の規模を誇ります。それらを使ったツツジ属植物の分類学的研究、園芸品種の起源、栽培方法の確立、指導などを行っています。

■県内に自生する絶滅危惧種の保全

①オキナグサの保全（地域との協働による保全）

中越大震災（H15）で崩壊した魚沼市の棚田の

畔にあるオキナグサ（全国：絶滅危惧Ⅱ類、新潟県：絶滅危惧Ⅰ類）自生地への復元と保全活動を魚沼市や地元住民、地元の広神西小学校、NPO 法人魚沼交流ネットワークなどと協力して行っています。現在、自生地をほぼ震災前の状態へ復元した他、同地域に1,000個体以上の植え戻しを行い400個体以上が開花結実に至っています。



震災後に地域と協働で行ったオキナグサの植え戻し活動

この活動は環境省生息域外保全モデル事業にも選出され、地域の協働参画のモデルとして役立つ

てられたほか、この事業の際に行ったシンポジウムでの提案がきっかけとなり、魚沼市による「魚沼市植物相調査」が平成 23 年から実施されることとなりました。この調査は市民参加型の環境保全活動としての新たな試みであり、これまでに 13 ヶ所 176 回の現地調査が行われ、これまでその地域に分布しないとされていた植物が新たに確認されるなど多数の成果を挙げています。

②越後平野の湿生植物に関する調査・研究（新潟大学との共同研究）

越後平野は信濃川と阿賀野川の流域に広がる約 2,000km²の面積をもつ日本海側最大の平野です。かつては大湿地帯でしたが、1922 年に大河津分水が完成したのちに乾田化が進み、その後の圃場整備などにも伴い、水生植物は急激に姿を消しました。

しかし、新潟大学との共同研究で河川や水田、農業用水路に生育する植物を調査したところ、多くの希少種が確認された他、ミズワラビやアブノメ、マルバノサワトウガラシなど県内で新たな生育地が発見された絶滅危惧種もあり、湿地の管理と湿生植物の出現特性に関する研究を行っています。

③十二潟での総合学習（保全学習支援活動）

当園では小学校の総合学習に協力し、これまでに数多くの学校で出前授業を行ってきました。

その一つとして、新潟市北区にある岡方第一小学校と地域の岡方地区コミュニティと植物園が協力して実施している、十二潟の環境やそこに生

えるアサザについての学習が挙げられます。

十二潟は、阿賀野川の三日月湖（河跡湖）で、アサザやガガブタが生える新潟では数少ない湖沼です。この活動は、その湖沼の河川開発の歴史や、環境省



十二潟で行った船上観察会

の準絶滅危惧種に指定されているアサザの生活や水深や水質などの生育環境、帰化植物のチクゴスズメノヒエの生育状況などを調査し、すばらしいふるさとの自然を理解し、残して行こうという取り組みです。

地域と教育機関が一体となって地域の自然を守る活動をこれからも応援して行きます。

■ツツジ属の調査研究および生息域外保全

当園ではツツジ属植物の自生地調査および生息域外保全を進めており、現在までに由来の明らかな約 400 種を収集しています。なかでもツツジ類（ツツジ亜属：ヤマツツジとミツバツツジの仲間）のコレクションは世界有数の規模を誇ります。

収集した材料は、種内変異の幅を知るために数多くの産地から種子での導入を図っています。これらの材料は観賞や保全の材料とされるだけでなく、ツツジ属の分子系統やツツジ類園芸品種の起源に関する研究の材料として利用しています。これまでに、別属とされていたイソツツジ属とヨウラクツツジ属がツツジ属に含まれることが明らかとなった他、園芸品種の起源についてもクルメツツジ品種群の成立にモチツツジ亜節が関与するなどの新知見を得ており、また研究の過程で、新種や新品種を発見、記載を行っています。

本邦において馴染みの深い温帯産のツツジやシャクナゲを園内に植栽し、観賞温室内には珍しい熱帯や亜熱帯原産のヒカゲツツジ類（ヒカゲツツジ亜属）を展示することで、ツツジ属を通して熱帯と温帯の植物の形態や生態の相違を解説し、教育の材料としても利用しています。



高知県立牧野植物園、台湾林業試験所と合同の台湾ツツジ属調査

（久原 泰雅、2013 年 1 月）